

BEST INTERNATIONAL MEN'S MAGAZINE

2011年12月1日発行(毎月1回・1日発行)通巻103号



GENTLEMEN'S QUARTERLY

12 DECEMBER 2011
NO. 103
580 YEN

BOOK
IN BOOK

グローバル
エグゼクティブのための
アジア7都市必携ガイド



>ドバイショックは
嘘だった!?
クールでリアルな
ドバイ案内

>ボーイング787に
見る、新時代の
フライトスタイル

>ドリュウ・バリモアから
Twitter創業者まで、
"世界を変える旅"

エグゼクティブよ、
旅に出よ!

TRAVEL
SMART

*COVER STORY

中田英寿

日本の伝統文化をめぐる旅

HIDETOSHI
NAKATA

HOT WOMAN

>等身大のハリウッドスター
エマ・ストーンが魅せる
透き通る白肌セクシー

SPECIAL

>オンラインショッピングの
常識を覆す
ギルトの新ビジネスモデル

FASHION

>旅のパートナーにしたい
最新ラゲージカタログ

SUPPLEMENT

別冊付録

PETER
LINDBERGH'S
PORTOFINO

>ケビン・スペイシー、
ケイト・ブランシェット、
マシュー・フォックス、
真田広之 and more!

ピーター・リンドバーグ
スペシャル写真集





Christophe Viellard

The Family Tree

過去を知り、現在に生き、未来を創る
時空を超えた、エノキアンたちの旅

1981年にパリで発足したエノキアン協会は、創業者一族によって200年以上、看板を守り続けている老舗であり、現在もビジネスの状態で優良、かつ時代に即した経営を実践している企業の集団だ。数世紀の間、彼らはどのように生き抜き、会社を存続させてきたのか？ エノキアンたちの旅に迫る。

Photos: Manabu Matsunaga Text: Takaaki Suzuki
Cooperation: Les Henokiers Association <http://www.henokiers.com/>

Christophe Viellard

クリストフ・ヴィラール

エノキアン協会会長

1679年に鉄工職人としてスタートし、釣り針やビス、ネジの製作、溶接で知られるマルチカンパニーとして発展を続けるヴィラール・ミジェオン&CIE社の7代目当主。協会内でも人望が厚く、会長役を2年務めた後、今年再選された。

名が協会創設30周年を祝った。総会開催地では1社がホスト役となり、会員の受け入れから、イベント内容、ディナーまで、すべてが任せられる。今回はパリのプライベート銀行、バンク・J・P・オットンガーがその役を務めた。1786年創立、1800年代初頭には国立フランス銀行をも動かしていた、歴史ある由緒正しい銀行である。

家族の価値が、世界を支えるレオナルド・ダ・ヴィンチ賞

第1回の「レオナルド・ダ・ヴィンチ」賞の授与式の挨拶で、ダ・ヴィンチが生涯最後の3年間を過ごした、クロ・リュセ城の当主フランソワ・サン・プリス氏は、授賞の条件を「ダ・ヴィンチが多くての発明をしたように、また弟子たちにその技術や考えを伝授したように、歴史と伝統を重んじ、その遺産を伝授し続け、かつ常に会社を活性化し、最新の技術で運営していること」と語った。まさにエノキアンの理念が詰まった賞で、同族経営の企業にエールを送るものである。

行の正会員を合せて総勢80余

今年の総会のメインイベントである第1回の「レオナルド・ダ・ヴィンチ賞」授与式後、参加者全員で集合写真を撮影。パートナーや子ども同伴の家族ぐるみの参加者も多いのは、エノキアンならでは。パリ3区の遊園・自然博物館の中庭にて。この特集では9月22日～24日に行われたプログラム中、取材が許された2日間に同行、その模様をレポートさせていただいた。



長寿企業の秘密を知る
「エノキアン」とは？

エノキアン協会という名を耳にしたことがある人は、そう多くないだろう。ヨーロッパの企業を中心とした組織だが、発祥地のフランスでさえ、知名度は同じような状況だ。その活動は、同業種のエグゼクティブなクラブとは異なり、営利目的でないメンバー同士が、親交を深め、意見交換をし、国際的な同族経営の価値を通して会員企業の発展を図ろうというものである。

名称は、旧約聖書の「創世記」に登場するカインの子であり、メトシエラの父であるエノクに由来する。エノクは365年生き続け、死ぬことなく、天上に召され、天使に変容された。また、エノクは世界最初の都市ともされ、エノキアンにはエノクに住む人々という意味も。そうした歴史と伝統、繁栄にちなんでエノキアン協会となった。

会員数は38社。うちイタリア14社、フランス11社、ドイツ3社、オランダ2社、ベルギー1社、スイス2社、そしてヨーロッパ圏以外では唯一の国である日本からは赤福、岡谷鋼機、月桂冠、虎屋、法師の5社が参加している。年次総会は毎年、もちまわりで参加会員の国で開かれ、日本では3年前に、昨年はイタリアで行われ、30周年にあたる今年には、協会発足の地であるパリでの開催。3日間の会期中、22社と招待の元会員を合わせて総勢80余

9月23日(金)

ファミリービジネスのアンバサダー活動

エノキアン協会としての外部への活動は、同族経営についての講演会や日本の東日本大震災への支援活動と幅広い。そして、新たな賞を設立。

20:30～ ディナー

年次総会最初の公式ディナーは大統領官邸でもあるエリセ宮に近い、流石な建物のセルクル・ドゥ・リュニオン・アンテラリエにて。国籍、職種に関係なく、あらかじめ席が決められ、旧知の仲でも、初対面でも親睦が深められる。1年ぶりの再会の華やかなディナーとなった。

9:30～ 年次総会

※年次総会に出席しない同伴者は10:00～11:30まで絵画鑑賞
メンバーのみ、部外者兼務のオフィシャルな総会。年次報告や新メンバーの発表、会長選挙など、主に協会活動の要となる議題を話し合う。今年はプジョーが新たにメンバーに加わり、現会長のクリストフ・ヴィラル氏が再選、会長職を今後2年間続けることとなった。

19:15～ カクテル

12:00～ カクテル

授与式前後のカクテルやビュッフェでは、メンバーであるワイン製造業者のワインがふるまわれた。ブルゴーニュ・ワインのメッカであるボヌで、1797年からワインを運り続けるルイ・ラトゥール社からは11代目が出席。この赤ワインはゲストたちに大好評だった。

12:30～ 「レオナルド・ダ・ヴィンチ賞」授与式

この賞はエノキアン協会とレオナルド・ダ・ヴィンチの最後の手在地であるクロ・リュセ城により設けられた。2世代以上続く年間収益300万ユーロ以上の家族経営の会社に贈られるもの。そして、栄誉ある第1回の授賞企業はイタリアのサルヴァトーレ フェラガモ社。83年間、3世代にわたり、そのノウハウと伝統を守り続けてきた経営が評価された。1917年、16歳のときに船でアメリカに渡り、ハリウッドの名女優たちを雇にしたフェラガモの靴。13年、かの地に留まった後にフィレンツェに戻り、現在では世界中に約3000人の従業員を抱える大企業に成長した。「40年勤続の職人は、まるで家臣のようだ」と、ヴァンダ夫人は語る。写真左から、後方の女性ふたりがフェラガモ家の娘、その前の夫人はクロ・リュセ城当主の母親、トロフィを持つヴァンダ夫人、3代目の孫、家庭担当大臣、エノキアン会長、クロ・リュセ城当主。

17:00～ 最新脳医学研究所見学

パリ13区にあるピティエ・サルベトリエール総合病院にあるICMは、昨年10月に竣工したばかりの研究施設で、約600名の研究者が老化の原理、記憶や神経系の病、アルツハイマーやパーキンソン病などの研究を行っている。脳医学という分野は、直接関係はなくても、その運営や研究の進め方が、企業経営のヒントやアイデアになるため、今回の視察が実現。スライドを使ったICMの活動の説明では、多くのエノキアン協会メンバーによって最先端の医療設備などについて、活発な質疑応答がなされていた。こうした、さまざまな分野へ関心を寄せることも、企業トップには必要な要素である。

14:30～ 自由時間

12:45～ ビュッフェ形式のランチ



エノキアン協会会長のクリストフ・ヴィラル氏は、「過去は証人だ。我々の先祖は何度も革命、戦争、経済危機を乗り越えてきた。それは数世紀にわたる家族間での技術や企業の遺産文化的な教育の伝承によるものだ」と述べ、ダ・ヴィンチを「最先端の科学の研究、勤勉さ、創造性、先見の明に優れ、ヒューマンな人柄」と分析。その価値は企業にも欠かせないものであるとした。また、招待客の仏・家庭担当大臣も「家族は力であり、家族の価値が、社会を作ってゆく」と言明。この賞の意義を讃えるとともに、エノキアン協会の活動を高く評価していた。

多業種間の交流が誘うカルチャーの旅へ

エノキアン協会は実にさまざまな職種で構成されている。職人的な業種では楽器製作、木製の樽製造、シルク織りや繊維、ムラノ・ガラスや陶器など。食品関連ではワイン製造や菓子製造、植物性製品など。工業・サービス関連では鉄鋼、鋳物、海運事業、銀行、旅館に、音楽関連書籍のエディションまで、実に多種多様だ。その多様な企業の最も重要な共通点が同族経営である。日本のメンバーに関しては、「昔の日本の会社組織の基本は、同族経営であった。現代でも同族経営の中小企業が多い。日本からの参加はとても喜ばしく、彼らは積極的に活動してくれている」と、ヴィラル会長の

9月24日(土)

“古きを訪ね、新しきを知る”カルチャー体験

毎回、総会のときには企業見学や歴史的な場所、モニュメントを訪れる。今年も、由緒ある16世紀の古城見学のバスツアーを企画。



アネ城見学

大型バス2台に揺られて、パリの西部、78kmのところにあるアネ城へのショートトリップ。アンリII世が愛人であったディアヌ・ドゥ・ポワティエのために1547年にオーダーし、5年後に竣工したルネサンス様式の城として知られている。城所有者自らがガイドとして、広大な美しい所有地と城の内外を説明しながらまわり、エノキアンたちはリラックスしながら話に聞き入っていた。彼らにとっては、祖先が長年、守り続けてきた企業や家族の歴史と、城の歴史がオーバーラップするのだから。メンバー同士の話も弾んでいた。また、所有者家族が生活する通常は非公開の母屋も見学し、まさに心が豊かになる時間を体験。緑が深いガーデンでのアペリティフやランチは、映画のワンシーンのようで、ため息が漏れるほど。ゆったりと、くつろぎながらの思いがけない半日に、エノキアンたちは大満足の様子だった。



8:30
パリ出発



10:15~
アネ城
所有者による
解説付き見学

12:30~ アペリティフ



13:00~
ランチ

16:00
パリ到着後、解散。
自由時間

14:30 アネ城出発

創立200年以上の歴史をもつことが重要な基準なので、ブジョーを新参とすれば、最長寿は718年創業の石川県にある旅館、法師。また、従業員数では、フランスの伝統的なシルク織りの会社、ジャン・ロイズが15名、ブジョーが約20万人というスケールの違いがあるが、こうした異業種、経営体制の違う企

業に入るのか？ エノキアン協会に関する51の質問に答え、審査を受けることになる。年に3〜4社の応募があり、だいたい1社が新メンバーとなる割合だ。今年もは自動車産業大手のブジョーが入会した。創業201年目で、待ちに待った入会といえるだろう。

とどこで、会員はどのように選ばれるのか？ エノキアン協会に入るには、まず企業や経営に関する51の質問に答え、審査を受けることになる。年に3〜4社の応募があり、だいたい1社が新メンバーとなる割合だ。今年もは自動車産業大手のブジョーが入会した。創業201年目で、待ちに待った入会といえるだろう。

評価は高い。16世紀に創業、1980年にパリ店をオープンした虎屋は、パリ進出後に協会から入会の誘いを受け、その目的と信念に共鳴し、2008年に入会した。「どの会員企業もさまざまな困難を克服してきた歴史があり、言葉に出さなくても分かり合える思いがある」と言う。「フランスの会員が、虎屋パリ店や商品を我がことのごとく、ほかの会員に説明してくれたりと、国や業種の枠を超え、親しい友人として交流を深めている。次世代メンバーのビジネスだけではない可能性を大いに感じ、力強く思う」と同協会の素晴らしさを語ってくれた。

ある、伝統と近代性、技術の伝承と革新という、相反するものを、もれなく後継者に伝えていかなくてはならない。過去からの遺産である伝統や技術は、企業にとって必要不可欠なものだが、それだけでは最先端の技術を競い合う現代では生き残れない。そのバランスのとおり方により、ますますの発展が約束されるわけだ。

それにはエノキアンの根底にある、伝統と近代性、技術の伝承と革新という、相反するものを、もれなく後継者に伝えていかなくてはならない。過去からの遺産である伝統や技術は、企業にとって必要不可欠なものだが、それだけでは最先端の技術を競い合う現代では生き残れない。そのバランスのとおり方により、ますますの発展が約束されるわけだ。

業が交流できる点がエノキアンの魅力である。老舗の同族経営は、一見、現代の経営スタイルに逆行するかのように見えるが、「現代のビジネスは、短期間で稼げるだけ稼ごうとする傾向が強い。しかし我々は、緩やかながらも祖先から受け継いだノウハウを実践し、次世代に伝えていくのがミッションである」とウイラー会長。一攫千金とはかけ離れた、長期的なウイジョンで、後世までを見据えているのがエノキアンらしい。また、大企業間の企業買収によるリストラや工場移転に

業が交流できる点がエノキアンの魅力である。老舗の同族経営は、一見、現代の経営スタイルに逆行するかのように見えるが、「現代のビジネスは、短期間で稼げるだけ稼ごうとする傾向が強い。しかし我々は、緩やかながらも祖先から受け継いだノウハウを実践し、次世代に伝えていくのがミッションである」とウイラー会長。一攫千金とはかけ離れた、長期的なウイジョンで、後世までを見据えているのがエノキアンらしい。また、大企業間の企業買収によるリストラや工場移転に

9月24日(土)

終焉、そして、未来へと続くエノキアンの旅

3日間にわたるプログラムの最後は、博物館見学とガラ・ディナー。パリでの想い出と交流を、それぞれの胸に秘め、旅立ってゆく。

閉会

年次総会と「レオナルド・ダ・ヴィンチ賞」授与式の会場にもなった、狩猟・自然博物館に正装したエノキアンたちが戻ってきた。3日間の充実した日程を終え、最後のガラである。狩猟博物館を自由に見学した後は、庭園でカクテルを。ゆったりとした時間が流れ、話も弾む。ディナーでの話題は、仕事よりも、家族のこと、夏間の成長学の思い出と花が咲く。宴たけなわとなり、会員の30周年を祝うスピーチに続き、異例の会長夫人のスピーチ。ホスト役を誇るその思いやりに、会場は拍手で沸いた。国難こそ逢えど、家族愛で結ばれているエノキアンもまた大きな家族といえるのかもしれない。ドイツで開催予定の来年の総会での再会を約束して閉会となった。写真は、エノキアンの明日を担う、ヤングエノキアンの面々。パリでは、独自に行動し、さらに交流を深めていた。



過去を未来にリンクする
エノキアンたち

閉会のガラには、男性は全員タキシード姿で出席。協会の未来を担う若い世代も集合した。現在、企業の次世代候補となる20名ほどで、ヤングエノキアンの会を作って、活動している。彼らは、自ら、より協会の活動になじめるように、仕事だけではなく、他会員のところに滞在して親睦を深めながら、意見を交換し、結束を固めて協会に利益をもたらすことを目的としている。現代のビジネスに不可欠な情報処理や、コンピュータの扱いに長けた世代が先人をフォローししながら、10代前半のジュニアたちがファミリービジネスに

うんざりしないように、先人とジュニアの橋渡しをし、協会を活性化させるために活動している様子は、なんとも頼もしい限りだ。

協会の未来へ向けての展望は、「メンバーとなっているEFB GEEF(ヨーロッパ・ファミリービジネス)同族企業協会」での活動を通して、エノキアンの地位を向上させ、普遍的価値をもつ家族経営に忠実であることを忘れずに励む。「レオナルド・ダ・ヴィンチ賞での企業への後押し」を軸とし、会員企業のさらなる発展のために努め、「アメリカや南米からのメンバーも迎えたい」意向だ。

ハーバード大学やほかの有名大学の研究によると、今日、全世界の約70〜75%の企業が同族経営の職人的企業だといわれる。代々、伝えられてきた一貫した会社の経営理念を守り続け、さらに飛躍、発展しようとしているエノキアン協会。その活動と姿勢からは、現代の主流になりつつある、金儲け至上主義の企業にはない、ビジネスの最も基本的な本質とヒューマニズムを学んだ想いがした。それは家族への愛と、数百年の間に企業が育て、培ってきた伝統と遺産に裏打ちされた揺るぎのない信念に基づいている。「企業経営のバランスを保ち、普遍的な価値をもつ、未来の会社経営の力ぎを握るのは、ファミリービジネスだ」と、協会会長は確信をもって語っていた。

20:00
狩猟・自然博物館集合



20:00~ 博物館見学

20:30~
閉会ガラ・ディナー



エノキアン協会メンバーの日本企業

法師

法師
718年創業 / 温泉旅館業: 粟津温泉
神のお告げにより、掘り当てられた聖泉(ナトリウム硫酸塩泉)の湯治宿。全館を4つに分け、客室を70室備える。おもてなしの心を大切にする日本で最も古い宿のひとつ。創業約1300年は協会のなかでもいちばん古い歴史を誇る。

どらや

虎屋
1520年代創業 / 和菓子製造・販売
京都で創業し、御所に菓子を納めてきた老舗。「五感の総合芸術」といわれる和菓子を、四季折々の気候で表現している。1980年にパリ店をオープンし、その繊細な味わいで老若男女を問わず、舌の肥えたフランス人を虜にしている。

月桂冠

清酒
1637年創業 / 酒造業
月桂冠
京都府伏見区の酒造元。日本初の四季醸造システムや、米国で酒造職を稼働させるなど、常に革新性、創造性を大事にし、アルコール以外の新規事業開拓にも力を入れている。エノキアン入会は20年以上前で、日本会員では古参。

OKAYA & CO. LTD.

岡谷銅機
1669年創業 / 商社
金物商「徳屋」として、名古屋にて創業。現在は世界18カ国にネットワークをもつ、鉄鋼、情報・電機、産業資材、生活産業を扱う商社として躍進。エノキアン協会には2004年に入会し、08年には日本開催の総会のホスト役を務めた。

赤福

伊勢名物
赤福
1707年創業 / 和菓子製造・販売
三重県の伊勢名物として知られる赤福餅は、餅を赤い漆し船でぐるんだ生菓子。清流の五十鈴川に面した木造の本店。店頭で朱塗りの籠と、すべてが伝統のなかで生きている。1月を除く、毎月1日に販売される朔日餅も有名だ。